

## 論文

# 霜田史光研究落穂拾い（その3）

竹 長 吉 正

Supplements to the Research Work of Shiko SHIMODA（Ⅲ）

TAKENAGA Yoshimasa

キーワード：藤澤衛彦、大正期民謡祭、井上康文、福田正夫、  
民衆詩派の活躍、九条武子、高等女学校校友会雑誌、  
秋田県立横手高等女学校

### 全体の構成

- (11) 藤澤衛彦と大正期民謡祭
- (12) 井上康文の霜田史光論
- (13) 福田正夫における「民衆詩派らしい特徴」
- (14) 女学生における「理想の人間」と九条武子

## (11) 藤澤衛彦と大正期民謡祭

藤澤衛彦（ふじさわ・もりひこ）、この人の生れや経歴については、インターネットでもいろいろと記されているが、わたくしの知る限りで、信頼できる情報のみを記すと、次のようになる。

明治18年（一八八五）8月2日、学習院教師の息子として東京に生まれる。一部、埼玉県生まれとする説もある。明治42年、明治大学文科（\*明治大学文学部の前身）の第1回生として卒業。大学在学中、国学院大学出版部の児童雑誌『兄弟』『姉妹』の編集長となり、児童文化研究に関心を抱く。また、藤澤は在学中、夏目漱石の授業（明治37年度～39年度）を受けており、『明治学報』（明治41年6月8日）に発表した「鶯の声の心理的研究」と題する論文を、明治大学をやめた漱石に届けたという。（\*このことに関しては、吉田悦志「夏目漱石と明治大学生・藤澤衛彦」明治大学史資料センター『大学史の散歩道』vol.128参照）

大正3年（一九一四）に日本伝説学会を設立し、会長を務める。他に日本童話協会、童話作家協会、日本風俗史研究会、児童文学者協会などの設立に加わる。明治大学教授も務めた。昭和42年（一九六七）5月7日、死去。81歳と9ヶ月。

また、藤澤は大正の末年から昭和10年ごろまで民謡の研究と新民謡の普及を目ざし、民謡祭などのイベント活動に力を入れた。このことについては後ほど詳しく述べるが、この民謡の普及活動に関して、藤澤と霜田史光は深いつき合いをしたのである。

藤澤の編著書で、わたくしの所蔵図書は次のとおりである。

〈1〉 編著『現代童謡作家選集』（成象堂 大正14年9月20日）

泉鏡花から百田宗治まで全74人の童謡作品を収録。

巻末に編者による「日本童謡論」を収録。全740ページの大冊。

霜田史光の作品は、「雪」「薄<sup>すすき</sup>」「雨の唄」「空の雲」「ほ・じろ」「お星さん」「紫雲英と雲雀<sup>れんげ</sup>」「鶯」「椋鳥」9編を収録。

〈2〉『趣味の旅 伝説をたづねて』（博文館 昭和2年5月24日）

日本全国の主な伝説の場所を訪ねる案内記。

〈3〉『日本民謡の流<sup>ながれ</sup>』（東明堂 昭和9年1月20日）

「民謡とは何か」の序論から、「盆踊と盆踊歌」「雲の民俗と民謡」「数へ歌の研究」などの各論を経て、「新民謡と新流行歌」で締めくくる。

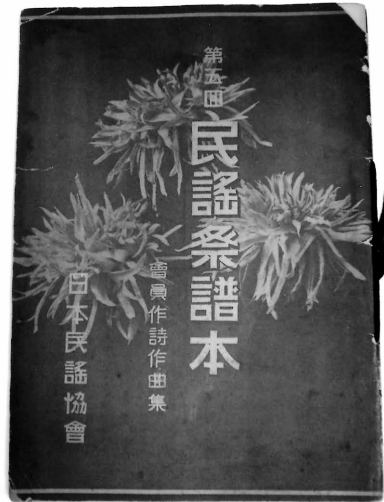
〈4〉『第五回 民謡祭譜本 会員作詩作曲集』（日本民謡協会 昭和10年11月2日）\*写真①

昭和10年（一九三五）11月2日、東京の日比谷新音楽堂で举行された第5回民謡祭の小冊子。B5判より少し大きく、縦26.3センチ、横18.7センチ。全40ページで、定価1円。

〈5〉論考「民謡概説」ほか 雑誌『国文学 解釈と鑑賞』第231号（至文堂 昭和30年8月）

特集「日本の民謡」。藤澤は巻頭の「民謡概説」のほか、「幕末から維新へ」「童謡」等3本の論考を執筆。論考「民謡概説」では「時代にふさわしい詩容」「郷土を離れざる音楽の美しさ」など「民謡の真実を求めて」奮闘してきた藤澤の民謡観が如実に示されている。「われわれが、二十年前、新しい時代のフォークソング提供を唱えた芸術運動」が墮落して、その「一派生<sup>てっ</sup>の花街小唄」等をはやらせた轍<sup>てっ</sup>を踏まないように、今度こそはと意気込んでいる。

〈6〉編著『世界児童文学全集13 日本の民話』（あかね書房 1959年



写真①

竹 長 吉 正

1月15日)

「夢見童子」「桃太郎」「舌きりスズメ」「ワラシベ王子」「おかまのうた」など、全40話を収録。

〈7〉『図説 日本民俗学全集第二巻 伝承説話編』（あかね書房 1960年2月29日)

「伝承説話とは何か」「民話発生の歴史」「民話の型」「童話とは何か」「日本の代表的童話」「民話の創造と発見」「日本民話文献資料年表」など。

これらの中で、〈4〉『第五回 民謡祭譜本 会員作詩作曲集』について、やや詳しく述べる。

この時（つまり、昭和10年）、日本民謡協会の主たる役員とされる「総務理事」は野口雨情と藤澤衛彦の二人であり、この冊子は殆んど藤澤一人で作ったと考えることができる。

役員は総務理事二人の他に、「常務理事」五人、「理事」八人、「評議員」十五人、「書記長」一人、「囑託」一人。常務理事に林柳波、藤井清水、藤田健次、理事に浜田広介、草川信、白鳥省吾、本居長世<sup>ながよ</sup>、評議員に中山晋平<sup>くりにし</sup>、栗島すみ子（\*映画女優）、梁田貞、松村又一、北原白秋、三島一声、弘田龍太郎など、作曲家、詩人、歌手、俳優と当時の多彩な顔を集めている。

冊子の中身は、「民謡祭について」（筆・日本民謡協会）「民謡道を共に歩む詞」（作・藤澤衛彦）「会員作詩作曲」（詩と譜、全19作）の三部で構成されている。

会員作詩作曲の全19作は、次のとおりである。

- |                         |         |         |
|-------------------------|---------|---------|
| 1. 秋の鄙歌 <sup>ひなうた</sup> | 作詩・松村又一 | 作曲・藤井清水 |
| 2. 旅のなさけに               | 作詩・越川 広 | 作曲・水原英明 |
| 3. 多摩の小石                | 作詩・浜田広介 | 作曲・樋口翹影 |
| 4. 芋掘り                  | 作詩・白鳥省吾 | 作曲・本居長世 |
| 5. すすきっぼ                | 作詩・東海刺生 | 作曲・河村直則 |
| 6. 細道                   | 作詩・野口雨情 | 作曲・梁田 貞 |

- |                       |                    |          |
|-----------------------|--------------------|----------|
| 7. 目かくし遊び             | 作詩・渡辺秋水            | 作曲・坊田かずま |
| 8. 浅間曇れば              | 作詩・藤田健次            | 作曲・小田嶋樹人 |
| 9. 丹波川のほとり            | 作詩・松丸 完            | 作曲・内藤彰一  |
| 10. 思ひ遙かな             | 作詩・末綱 鱗            | 作曲・斎藤太計雄 |
| 11. 筑波時雨              | 作詩・吉成氷雨            | 作曲・内藤彰一  |
| 12. 耕作唄               | 作詩・鹿山鶯邨            | 作曲・森 儀八郎 |
| 13. 里の春               | 作詩・安川信次<br>編曲・平岡均之 | 作曲・大村能章  |
| 14. 岡山節 <sup>おし</sup> | 作詩・鳥越 強            | 作曲・藤井清水  |
| 15. 糸取唄               | 作詩・大村主計            | 作曲・小松平五郎 |
| 16. 旅にやつれて            | 作詩・林 柳波            | 作曲・小田嶋樹人 |
| 17. いろに咲いたか           | 作詩・深田市子            | 作曲・草川 信  |
| 18. 山枯れ野枯れ            | 作詩・山口義孝            | 作曲・森 儀八郎 |
| 19. 遠い峠               | 作詩・大関五郎            | 作曲・平岡均之  |

「15. 糸取唄」は蚕の繭から生糸がとれるまでを唄っているし、「16. 旅にやつれて」は八歳から十歳くらいの角兵衛獅子が「知らぬ他国」を回る寂しさ・切なさを唄っている。今や養蚕業は衰退し、また、角兵衛獅子の姿はほとんど見る事が出来ない。いずれも、時代や社会の変化と共に消えてなくなったと言える。

これらの中で、今もわずかに理解できるのは「3. 多摩の小石」「6. 細道」である。「3. 多摩の小石」は、次のような詩である。

### 多摩の小石

多摩の河原の

砂利とり船は

砂利と小石をふりわける

竹 長 吉 正

サラサラサラリ と サアサトナ

砂利は砂利ゆゑ

砂利とり船に

あとの小石は川底に

サラサラサラリ と サアサトナ

沈む小石は

何見て沈む

ちよいと青空見て沈む

サラサラサラリ と サアサトナ

細道

<sup>かよ</sup>  
通て来るなら

<sup>たんぼ</sup>  
田圃の道を

夜は螢の

灯をあてに

人目さへなきや

裏戸を開けて

麦粉 ひきひき

わたしや 待つ

馴れた道でも

闇夜は暗い

蛙 田で鳴く

声 あてに

誰もゐなけりや

蚊遣りを焚いて  
寝ずに明かそと  
わたしや 待つ

これらの歌は、当時、「新民謡」とされ、今いうところの「流行歌」であった。新民謡のあるものはレコード化され、日本全国に広がった。但し、第五回民謡祭に集まったこれらの作品の中にレコード化されたものがあつたかどうか、わたくしの調査はそこまで及んでいない。昭和五年頃から、新民謡や詩の朗吟がレコード化される機運が高まったことは確かである。

ところで、『第五回 民謡祭譜本 会員作詩作曲集』に収録の二文「民謡祭について」（筆・日本民謡協会）「民謡道を共に歩む詞」（作・藤澤衛彦）を読むと、日本民謡協会の歴史が、よくわかる。以下、それを年表にして示す。

昭和3年の春	日本民謡協会の結成
昭和3年10月2日	東京市主催の第1回民謡祭が、日比谷の新音楽堂（*野外）で開かれる。
昭和4年9月22日	第2回民謡祭
昭和5年11月16日	第3回民謡祭
昭和9年10月14日	第4回民謡祭 この時から、日本歌謡協会の指導を得る。
昭和10年11月2日	第5回民謡祭

霜田史光は民謡祭の第1回～第3回を中心に運営した。彼は当時、日本民謡協会の事務局を引き受けていたからである。しかし、病気のため、昭和6年以降、事務局の仕事をやれなくなった。史光は昭和8年、亡くなるが、この間（つまり、昭和6年～昭和8年）、民謡祭が行われなかったのは、事務局を担当する人間が見つからなかったからである。そして、昭和9年、

竹 長 吉 正

藤澤がこの仕事を受け継いでやることになったのである。これには霜田史光と藤澤衛彦との深いつながりがあった。このことについては、後ほど詳しく述べる。

ところで、藤澤はこの小冊子『第五回 民謡祭譜本 会員作詩作曲集』を一人で編集し、また、自ら二文「民謡祭について」「民謡道を共に歩む詞」を執筆したのである。それらの主要な箇所を以下、引用する。

協会員たる詩人の提出にかかる新民謡を集めて協会員たる音楽家<sup>これ</sup>之を作曲し、更にこれを舞踊<sup>まいとし</sup>に表現することに努め、毎歳これを挙<sup>こ</sup>行して、その進歩向上をはかるを目的とする。（「民謡祭について」より）

遊びの生活<sup>おい</sup>に於ても、働きの生活に於ても、人がどれほど律的運動に頼らねばならないかといふことを考へるとき、より一層、民謡の生命の、人生とともにあることの深さが認められる。（「民謡道を共に歩む詞」）

これらの文章を読むと、藤澤が史光との義理立てのためだけに民謡祭の仕事を引き受けたのでないことが、はっきりする。すなわち、藤澤衛彦自身、新民謡の価値や意義深さについてよく理解していたのである。

ところで、藤澤衛彦の仕事を一リストアップしてくると、彼が民話、伝説、民謡、童謡というように、庶民の話しことば文化、唄文化（つまり、今日で言うところの、いわゆる「大衆文化」）に強い関心を持っていたことが明らかとなる。史光が活躍した当時、詩壇の中心が「民衆派」（もしくは民衆詩派）であったことを想起すれば、藤澤衛彦が同時代人として、そのような大衆の庶民文化に強く魅かれていたことに納得がいく。

藤澤が前掲の図書リスト〈1〉『現代童謡作家選集』で挙げていた史光の童謡作品から、「雪」「空の雲」「紫雲英と雲雀<sup>れんげ ひばり うぐいす むくどり</sup>」「鶯」「椋鳥」の五篇（\*現代表記に改め）を次に掲げる



雪

白い

小さな

おどりこ  
踊子さん

空から踊って

降って来る

後から 後から

限りなく

乱れておどる

踊子さん

踊りつかれて

みち  
路の上

屋根の上にも

眠ってる

白い

小さな

踊子さん

空の雲

空の雲

白い雲

ふうわり ふうわり

飛んでゆく

竹 長 吉 正

空の雲

白い雲

わたしも一緒に

飛びたいな

ふうわり ふうわり

空中を

家も畑も

見下ろして

ふうわり ふうわり

飛びゆけば

はなし  
お囃にある天国の

ごてん  
花の御殿に

行かれよか

れんげ ひばり  
紫雲英と雲雀

紫雲英の若芽が

首出して

春が来たよと

にこにこしてる

空には雲雀の

うたうたい  
唱歌者

「紫雲英さん、おはよう」

「雲雀さん、おはよう」

雲雀の歌の

お礼にと

紫雲英は大きくなってから

花を咲かせて

見せました

うぐいす  
鶯

楽しい春の

おつかいさん

わたしの窓で

ないておくれ

ほう ほう

ほう ほけきよ

鶯 おまえは

どこから来たの

わたしは南の 山国の

しあわせ国から来たのです

ほう ほう

ほう ほけきよ

しあわせ国の女王さま

あなたによろしく

いいました

竹 長 吉 正

ほう ほう

ほう ほうけきよ

むくどり  
椋鳥

夕べの<sup>むく</sup>椋の木

黒い雲が かかった

父さん <sup>あした</sup>明日は

雨かしら

さあさあ 騒ぐは

裏山の 風が吹いてるの

明日 雨だと

椋の木へ

登ることさえできないな

<sup>ひとよ</sup>一夜 夢見て

起き出て 見たら

楽しみにした 椋の実は

夕べの雲が食べたのか

一つも枝に 見えはせぬ

史光の童謡作品「雨の唄」「ほゝじろ」「お星さん」等についての本文と論評は拙著『霜田史光 作品と研究』（和泉書院 2003年11月）所収の論考「霜田史光の童謡と童謡観」で記しているの、そちらを参照していただきたい。また、「<sup>すすき</sup>薄」は拙編著『霜田史光の詩と詩論』（埼玉大学教育学部竹長研究室 2005年12月）に収めてあるので、参照していただきたい。

史光の童謡作品は、数は多くないが、なかなかの佳品である。歌われる詩を目ざしていたこともあり、詩語の平易さと、詩全体のリズム感が工夫されている。

さて、この項目（藤澤衛彦と民謡祭）の締めくくりとして、史光の筆になる藤澤についての人物スケッチを掲げておく。

### 藤澤氏のプロフィール —やや漫画的な—

霜田史光

五六年前、「藤澤さんの忘れっぽ」は我々の仲間で有名なものであった。近頃はいっこうに、そんな話題も起らないけれど……。

「あの謹厳着実な学者の一面に、童話の主人公みたいなどころがあるんだね。」

「うん、それも西洋の王子さまでなくて、やはり日本童話の気のいい、どこかユーモアのある翁さん……。」

この翁さんは老人でなくて子供と同じだ。何しろ童話の主人公なのだから。

「あそこがあの人<sup>の</sup>尊いところだよ。単なる学問の虫にならないで、芸術的分子が多分<sup>に</sup>あって。」

けっきょく、「藤澤さんの忘れっぽ」の話もそんなところへ落ちて行って、好評となってしまう。

ある用件のために何日何時来てくれということに、こちらも承知して、いざその日その時刻に参上するとお留守、では明日今頃参上するからと申し置いて帰る。しかし、翌日伺っても、またお留守、お帰りの時間も分からなければ何らの言い置きもない。また、翌日に行っても逢えない。こうなりゃ根気競べだと、逢えるまで毎日通いつめようと一週間も日参すると、やがて在宅の日にも恵まれるというもの。

「どうもこのところ忙しくてね、あの事？ ああ、そうそう、すっかり忘

竹 長 吉 正

れちゃってねえ。」

ポカンとして退出する。このような事件に逢うのは僕一人ばかりでなく、近い友人四五人の間に順繰りに起こる。

それでいて、とても親切だ。一度は忘れても、その次にはわざわざ我々のために足を運んでくれたりして、仕事やその他の便宜を計ってくれる。そして、また、いつお訪ねしても快く逢って話してくれること、文壇の大家や世間の学者のようではない。

いまのお宅は応接間、書斎、書庫などが別になっている様子で、あのすばらしい蔵書を覗く山もないが、森川町時代には山と積まれて、座る場所も乏しい中へ通され、誰しも初めてだと一驚を喫する次第だった。その虫食い本の中に埋まって、藤澤氏はいつも質素な身装りにドングリ頭、どこやら学生のような気風さえ漂わして、閑居することなく絶えず何やら仕事をしておられる。小人閑居して不善をなすの諺と反対に、閑居しない藤澤氏は一種の人格を備えている。ちっとも重苦しくなく、洋々と流れているようで、それでいて着実な学者的気品がピタリと底に据わっている。

民謡童謡などの古い調査を我々に聞かせる時などは、殊にお顔も輝き、お声も金属的な素質を増す。

「この頃、碁を始めてね。」と、今年の始め、三年振りでお目にかかると言われた。

実に僕は意外な感じがした。かつて氏は青雲の志を抱いている頃、囲碁に凝ったことがあったそうだが、叔父さんが将来を思って盤石（\*引用者注記:碁盤と碁石）を取上げてしまったとは、よく我々に話されたことだった。その後、精励刻苦して今日の藤澤氏を築き上げたのであろうが、御自身も全く捨てた碁石を十何年かして再び持ち出したというのだから、如何に碁好きな僕でも、意外の感なくてはられない。

今や、一事業成って再び、天（\*引用者注記:最初の、または、天から与えられたの意）の趣味を戻したか、と僕は考えてもみたが、そうでもないらしい。藤澤氏の現在は少しも安んじておられないで、ますます勉学、

ますます精励という様子に、ますます僕をして感嘆せしめる次第だ。

その応接間には美事な碁盤みごとが置かれてあるが、それも好敵手たる雄山閣主の長坂氏ひとつきと一月に一度やったりやらなかったりだと聞いては、我等の藤澤氏のために慶賀に堪えない。もっとも将棋三段の菊地寛氏もあれだけの仕事をぐんぐんやっているのだから、あえて、せっかくの御趣味をお止めするにも及ぶまいと、けっきょくは我田へ水を引きたくなるが、藤澤氏のお腕前？ それはナイショナイショ。

[本文注記]

1. 本文の初出（原文）は雑誌『民謡詩人』第2巻第8号（昭和3年8月）。この号には〈藤澤衛彦観〉として、白鳥省吾、霜田史光、渡辺波光の三人がそれぞれ藤澤衛彦についての短い人物スケッチを書いている。これは、そのうちの一つである。
2. 原文は旧漢字旧仮名遣いであるが、ここでは新漢字新仮名遣いに改めた。
3. 筆者（霜田史光）独特の言葉遣いをしている箇所、一般読者にはわかりにくいと思われる箇所には、例えば、盤石（\*碁盤と碁石）のように\*を付けて注記を施した。
4. 原文では雄山閣主の「長坂氏」を筆者（霜田史光）は「金坂氏」としているが、ここは誤記であると判断し、「長坂氏」と訂正した。当時の雄山閣主（雄山閣社長）は長坂金雄であり、筆者の記憶違いである。

## (12) 井上康文の霜田史光論

井上康文（いのうえ・やすぶみ）は明治30年（一八九七）6月20日、神奈川県小田原町に生れる。福田正夫を知り、大正7年（一九一八）、『民衆』に同人として参加する。詩話会の会員に推挙される。大正8年（一九一九）、小川未明の紹介で春陽堂『新小説』の記者となり、文筆生活に入る。大正

竹 長 吉 正

9年（一九二〇）9月、第一詩集『愛する者へ』（新橋堂）を出す。大正10年（一九二一）、『民衆』が16号で廃刊となる。詩話会に対抗する結社「詩人会」を起し、詩話会に入れない若い詩人の結集をはかる。同人には花岡謙二、宵島俊吉（勝 承夫）、斎藤重夫、萩原恭次郎、林信一、恩地孝四郎、沢ゆき子、それに霜田史光が加わった。詩人会の雑誌『新詩人』を編集し、発行する。『新詩人』は大正13年（一九二四）、22号を出して廃刊となる。以後、小田原を拠点にし、福田正夫と共に、詩の普及活動に力を尽くす。特に昭和25年（一九五〇）、詩の朗読研究会を発足させ、NHKのラジオ放送と関わりながら、詩の朗読コンクールなどを主宰する。「民衆派」（もしくは民衆詩派）の詩人らしい、詩の普及活動、詩の大衆化運動であった。詩集は昭和41年（一九六六）に出した『独白』が最後となる。昭和48年（一九七三）4月18日、狭心症に急性肺炎を併発し死去。75歳と10ヶ月。

なお、井上には詩評論集『現代の詩史と詩講話』（交蘭社 大正15年1月\*この本は増補改訂版『新らしい 詩<sup>および</sup> 詩人とその変遷』と題して、昭和6年4月、同じ出版社から刊行）がある。この本は大きく、「一. 明治詩壇概観」「二. 大正詩壇概観」「三. 詩に<sup>あら</sup>現はれた諸分野」「四. 現代詩人とその作品」の四章で構成されているが、その三と四に史光の名が登場する。

まず、「三. 詩に<sup>あら</sup>現はれた諸分野」には、次の文がある。

古来から伝わっている民謡は、極めて短い言葉で、よくその人情・風土を表わしていたが、現代の民謡は、その歌詞が甚だ長い恨みがある。これは生活や感情が複雑になってきたし、時代精神が単純でない故<sup>ゆえ</sup>であるかもしれぬ。

詩の一分野として、しかも、国民的詩歌の唯一のものとして、民謡は常に新しい時代生活、思想、感情などをもって歌われなければならない。人間が永遠に失うべき歌ではない。

民謡、詩によって、その国の状態がどんなであるかを知ることがで



きるほど、それは深い国民的精神をもったものでなければならない。民衆が生活のうちで詩を失うことができないように、また、歌うべき民謡も失われてはならない<sup>(注1)</sup>。

このような井上の民謡観は、史光にも共通していたと考えることができる。そして、井上は、現代の民謡詩人として、野口雨情、北原白秋、白鳥省吾、福田正夫、霜田史光ら四人の名前をあげ、彼らによって「新しい時代の民謡の出現を提唱し、その作品が示されるにいたった」（『新らしい詩<sup>および</sup>及 詩人とその変遷』144ページ）と述べている。

また、「四．現代詩人とその作品」の章では、生田春月、野口米次郎、多田不二、前田鉄之助ら三十一名の詩人の中に霜田史光をあげ、彼の作品「人生送迎」を引用している。「民謡から影響をうけたやうな一種の軽妙な手法と、センチメンタリズムがある。詠嘆的なところがある。」（『新らしい詩<sup>および</sup>及 詩人とその変遷』268ページ）と寸感を記している。この寸感は、よく当たっている。確かに史光の詩は軽妙であり、また、センチメンタリズムと詠嘆的なところが特色である。それは彼の詩の弱点であるとともに、個性である。弱点を個性として、自分の詩の世界を作っているところに、彼の詩の魅力がある。高村光太郎の詩のような堂々とした重厚さはない。また、西脇順三郎や村野四郎といったモダニズム派の詩のような理知の計算や工夫が見られない。しかし、史光の詩には庶民生活の哀感を気取らずに歌うという素朴さがある。そこが彼の詩の本領なのである。類似した詩観及び詩人としての資質をもっていた井上は、自分自身の弱点をも見つけながら、史光を批評しているのである。

ところで、井上康文の詩作品を見てみよう。

まず、詩集『梅』（富岳本社 昭和22年4月20日）から「梅」と題する作品だが、それは次のとおりである。

竹 長 吉 正

梅

古き枝に蕾をつけず、  
青き梢に梅は花を開く。

鉢植の梅の古木に、  
水を与え、陽を与え、  
春を待つ心を与え、  
ふくらむ蕾たのを愉しむ。

梅は古き枝に花を開かず、  
生命いのちあふるる新しき梢に咲く、  
馥郁ふくいくとして春に生きて咲く。

もう一篇、詩集『天の糸』（自由詩社 昭和31年6月）から「風景」と題する作品を、次に示す。

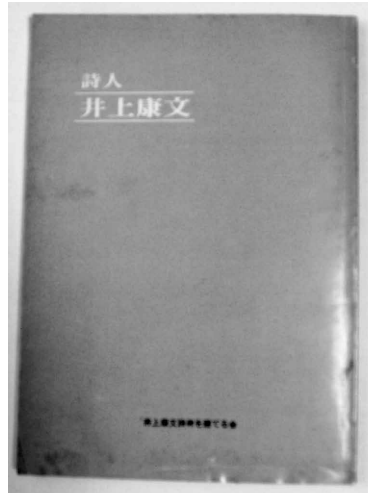
風景

窓から顔を出しては危ないよ、と  
子供に注意しても  
子供はそんなことには耳をかさない  
汽車の窓から顔をつき出して  
飛びこんでくる風景を見ている、  
子供は進む方向に興味をもち、  
勢いよく飛んでくる未知の風景を喜ぶ。  
私は過ぎ去って速度ののろくなった  
畑や川や森をぼんやりと見ている、

疾風に顔を向けなくて、  
静かに遠のいてゆく風景を見ている。

井上には民衆詩派特有の長い散文的な詩が多いのだが、引用したこれらの作品は比較的、説明的な叙述が少なく、詩的表現としてよくできている。

なお、井上康文に関する資料として、井上康文の誌碑を建設する会／記念誌編集委員会編『詩人・井上康文』（小田原市立図書館内 井上康文の誌碑を建設する会 昭和55年6月※写真



写真②

②) がある。

### (13) 福田正夫における「民衆詩派らしい特徴」

福田正夫と霜田史光との接点は、井上康文ほど深くはない。しかし、「民衆派」（もしくは民衆詩派）の先輩として見ておく必要がある。

福田正夫（ふくだ・まさお）は明治26年（一八九三）年3月26日、井上と同じく小田原に生れた。父親は医師。堀川という姓であったが、十七歳の時、福田家の養子となり、福田姓を名のる。神奈川県立師範学校を卒業し小学校の教員となるが、養家の勧めで東京高等師範学校を受験し、体操科に入学し上京する。東京では白鳥省吾らと知り合い詩作に夢中になり、高等師範学校を退学し、第一詩集『農民の言葉』（大正5年）を刊行する。大正5年（一九一六）、神奈川県に帰り小学校の教員をつとめながら詩作を続ける。大正6年（一九一七）、詩話会の会員となり、大正7年（一九一八）、井上康文らと『民衆』を創刊する。トラウベル（アメリカの民衆派詩人）の詩の翻訳や紹介に力を入れる。大正10年（一九二一）三月、分教場など

竹 長 吉 正

の小学校教師を八年間続けてきたが、欠勤や思想上の問題が起こり、辞職する。28歳であった。大正12年（一九二三）十二月、一家で東京の世田谷下北沢に移る。昭和5年（一九三〇）からレコードの作詞を手がけるようになり、昭和13年（一九三八）、「愛国の花」（作曲・古関裕而、歌手・渡辺はま子\*コロンビアレコード）がヒット作となる。昭和戦後は詩作の他に、小説（少女小説を含む）を書いた。昭和26年（一九五一）、校歌の作詞を行ったり、放送詩を作ったりするが、この頃から脳出血の発作を起こす。昭和27年（一九五二）6月26日、死去。59歳と3ヶ月。

福田正夫と親交のあった詩人は多いが、中でも石垣りんが有名である。石垣は「心を打った男たち——福田正夫」（『日本経済新聞』昭和52年8月1日～3日）で福田のことを回想している。以下、石垣の文を引用する。

森は伐られ  
川水は涸れる<sup>か</sup>  
田舎の村々、路々<sup>みちみち</sup>  
青ざめた呻吟<sup>しんげん</sup>が  
どこからか ひびいて来る

大正期の農村を題材とした「青ざめた田舎」という詩である。第一詩集『農民の言葉』が出版されたのは大正五年であったが、私はまだ生まれていない。

私を含む何人かの女性が、福田正夫の指導でわずか十頁ほどの同人詩誌『断層』を創刊したのが昭和十三年十一月。私は銀行で働きながら、物を書くことに余念のない文学少女のハシクレだった<sup>(注2)</sup>。

このように回想する石垣は初め、投書雑誌の詩の選者として福田正夫を知ったようであるが、後には同人詩誌『断層』を介して福田の指導を受けた。石垣は前掲の文章に続けて、次のように述べている。

よくも少女を相手に、あのように熱心に詩論、方法論などを語りきかせてくれたものだ、と追懐する。後年、君は福田さんのわるいところ、自然主義の冗漫なところを受け継いでいるヨ、などといわれた私は不肖の弟子であり、師も私を引き合いにされるような欠点の故か、生前の、しかもその若い日の盛名ほどパツとしない<sup>(注3)</sup>。

ここには石垣らしいブラックユーモアをにじませながら、自らの自己存立基盤を語っている。確かに詩人石垣りんは福田正夫の弟子らしい受け継ぎをしている。それは、すばらしい部分で、詩としてのまっとうなところ、さらには、詩人としての本質である。しかし、「自然主義の冗漫なところ」も受け継いでいると自認しているのは、民衆詩派の散文的なところ（\*これは詩の表出方法に関する部分での特徴）、乃至は泥臭く、生活的なところ（\*これは詩の素材、題材選択に関する部分での特徴）である。

福田正夫の詩人としての歩みは、略伝でも見たように、民衆詩派の詩人として「日本のトラウベル」といわれるように盛名をはせた時期がある。しかし、その時期は長く続かなかった。民衆詩派の時代が過ぎると、次は民謡詩の時代が来て、さらにそれはレコード化、歌謡詩の時代へと展開していく。そして、福田正夫は歌謡詩「愛国の花」で、また、盛名をはせる。つまり、福田は詩人として二度、頂点を極めたのである。しかし、昭和の戦後は少女小説を書いたり、校歌の歌詞を作ったり、本来の詩人としての活躍を得ることができなかった。

このように福田正夫の生涯をたどって来ると、霜田史光の「見果てぬ生涯」が、わずかながら予想されないことはない。

霜田史光は明治29年（一八九六）6月19日の生れで、昭和8年（一九三三）3月11日、死去した。年齢は福田正夫より三年、年下である。史光の死んだ昭和8年（一九三三）には福田正夫は四十歳であり、この年10月7日、東京の日本青年館で「朗吟と舞踊と歌謡の夕」<sup>ゆうべ</sup>（主催、ハイキングクラブ）

竹 長 吉 正

が行われ、世界巡行中のアンナ・パヴロワのバレエ公演があった。この催事の中で福田は、詩の朗吟を行った。

また、井上康文は明治30年（一八九七）6月20日の生れであり、史光より一年、年下である。

福田正夫にしろ井上康文にしろ、詩人としてほぼ、似かよった歩みをしている。二人の歩みを知ることは、霜田史光の「ありえたかもしれない」その後の歩みを想像する上で、じつに重い情報を得ることにほかならない。

福田の詩は、その大半が『福田正夫詩集』第一輯～第五輯（昭和2年10月～昭和3年3月）に所収されているが、その中から「山の家の子供」と題する詩を次に掲げる。

#### 山の家の子供

学校の子供らが山遊びの帰りを、  
林の向こうから淋しそうな声で、  
「おはなちゃあん」と呼ぶ子供、  
山の家の子供。

誰を呼ぶのでもない、  
でたらめに名をつけてやたらに呼んでみる、  
それは淋しいから、  
それはみんなが畑に出たあとをひとりで淋しいから、  
よろこばしいこの学校の子供らの声をなつかしんで呼ぶのだ、  
世界の友を求める子供の天真の心から呼ぶのだ。

「おおい」と返事をしてやれば、  
もう、恥ずかしそうに黙ってしまう、  
しかし、通りすぎてしまったあとから、

「おはなちゃあん、どこに行ったあのう」と  
期待する返事を待つ心で呼ぶ、  
山の家の子供、  
姿は林にかくれて見えぬ。

純朴な、山の子どもの姿をよくとらえている。さすが、小学校の教師を務めた福田らしい感性が、躍如している。

福田正夫や井上康文ら、民衆詩派の詩人について大井康暢は、次のように述べている。

モダニズムの詩人たちが都会人なら、民衆詩派は、やはり労働者である。しかし労働者とは言っても、それは詩壇の耽美的な貴族趣味に対して、言語の生命力を回復しようとした、生活するものの歌としての詩を主張した人たちだった<sup>(注4)</sup>。

大井は、「モダニズムの詩人たち」（例えば村野四郎）と比較しながら福田正夫の詩の特質を検討しているのだが、現代詩の主流につながる昭和初期詩壇のモダニズムの詩は確かに垢抜けている。つまり、野暮ったさ、素人くさい感じがしないということである。それに対して、民衆詩派の詩人の詩は、わかりやすいが、表現の仕方が稚拙で、くどすぎる。つまり、民衆詩派の詩人は大衆性をかかげて農民や町工場の労働者の中に自ら入っていった、詩を作った。それを大井康暢は「生の根源に立ち返って自己を凝視し、みずからを生贄<sup>いけにえ</sup>としても民衆を愛し抜こうとする、受苦へのかたい決意」<sup>(注5)</sup>とらえている。つまり、それは別言すれば、詩が「社会性」をもち、プロレタリア的な感覚、感情、感性を意識するということでもある。

詩人も自身の生きている時代や社会と無関係に生きることは難しく、大正時代の詩人は等しく、プロレタリア的な感覚、感情、感性を自ら育んでいったのである。

竹 長 吉 正

しかし、それでは民衆詩派の詩人と一括される福田正夫や井上康文らの詩作品のすべてが、そのようなプロレタリア的な感覚で作られているかという、どうもそうではない。その辺の柔軟な見方が必要である。要するに、後世の我々の、詩作品に対する見方が大事である。「この作品は民衆詩派の詩人の作品であるから」という前提で彼らの作品を見るのと、そのような先入観念を捨て去って作品を見るのとでは、大いに違う。

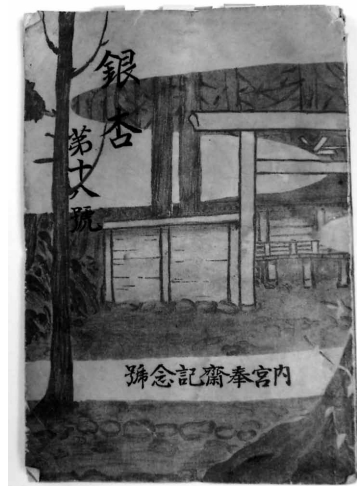
わたくしは、詩人の作品を例えば「これは民衆詩派の詩人の作品である」などとレッテルを張って、読むことをしない。今でも読むに値する作品があるかという観点で評価しながら読む。単に時代性の証言という意義だけで存在するような作品は、早晚、人々の心から忘れ去られる。

そういう、わたくしの詩の見方からすれば、前掲の「梅」(井上康文)「風景」(同前)「山の家の子供」(福田正夫)などは、今でも読むに値する作品である。つまり、詩作品として古びていない、ということである。

#### (14) 女学生における「理想の人間」と九条武子

ここに一つの資料がある。それは『銀杏 第十八号』と題する雑誌（\*写真③）である。発行は昭和10年（一九三五）12月24日で、発行所は秋田県立横手高等女学校校友会。いわゆる、校友会雑誌である。「文苑」と題する欄があり、「私の崇拜する女性」について十四名の女子学生が執筆している。編集委員がこのような題で在學生に文章を募ったようである。

統計をとると、次のような結果（応募総数十四名）である。



写真③



九条武子	2名
乃木静子	2名
沼田香雪	2名
母	2名
紫式部	1名
ジャンヌダルク	1名
ナイチンゲール	1名
鈴木宇右門の妻	1名
瓜生岩子	1名
山谷市子	1名

十四名の女子学生が挙げている人は、はたして、どのような人たちであろうか。まず、洋の東西を問わず、古来有名な人たちである。例えば紫式部、ジャンヌダルク、ナイチンゲールといった人たちである。次に、乃木静子（乃木希典夫人）、沼田香雪（横手の偉人。戊辰8月＝1868年、横手城付近で戦のあったとき、暗夜、夫の生首を持ち歩いたという。本校の講堂にこの人の写真が掲げている。）といった人たち。この人たち（乃木静子、沼田香雪）は、いわゆる「烈女」で、気性の激しい、男勝りの人たちである。第三に、九条武子、鈴木宇右門の妻（宇右門は出羽の国、庄内・鶴岡の人。天明8年＝1788年の凶作のとき、私財をなげうって餓死寸前の人々を助けたという。妻もこれに共鳴して弱者を救済した。夫も偉いが妻も偉い。）、瓜生岩子（決して裕福でもないのに孤児や経済的に貧しい子どもたちを集めて、育て上げた。東京浅草観音の境内に夫人の銅像がある。）といった、慈善家の人たちである。第四に、「自分の母」や山谷市子という身近な存在である。山谷市子は当年17歳で調布高等女学校の4年生。14歳の時、母が亡くなり以後、5人の弟妹の世話をしている。自分たちと同じ年齢であるのに、尊敬できる生き方をしていると彼女たちは見ている。

紫式部やジャンヌダルク、ナイチンゲールを挙げるのは、いつの時代に

竹 長 吉 正

も変わらぬことだと判断するが、乃木静子や沼田香雪といった「烈女」を挙げるのは、当時の時代を思わせる。太平洋戦争が始まるのも近く、高等女学校の学生にも「激しく、強い女性」が理想とされたのである。第四のタイプ、つまり、身近な存在に理想像を探し求めるのも、いつの時代にも見られる現象である。

ところで、第三のタイプ、世のため、人のために尽くす人というのは慈善家といわれるが、それは自分に地位や財力があり、余裕のある人でないとできないという見方もある。九条武子は地位や財力のある慈善家だが、鈴木宇右門の妻や瓜生岩子はそうではない。もちろん、地位や財力があっても慈善などには目もくれないという人もいるが、そんな中では九条武子は一歩抜き出していた。女子学生が九条武子だけでなく、鈴木宇右門の妻や瓜生岩子に注目しているのが後世の我々としては驚かされる。そして、これは今日いうところの、いわゆるボランティア精神につながるのではないかと思う。昭和10年（一九三五）の日本の女子学生（彼女たちは当時16歳か17歳）が今いうところのボランティア精神に引かれていたというのは、興味深い発見である。

それはそうと、ここで本題の九条武子についてだが、彼女について女子学生はどのようなところに崇拜の念を示しているのか、もう少し具体的に見てみよう。

栗林 幸（四年生）は、次のように記している。

夫人は、大奥の姫君として花の如く愛<sup>め</sup>でられ健やかに成長しながら、冷たい運命の糸に操られ、後世、宗教的、敬虔な生活を送ったあの優姿には、永久に輝く光が宿されているように思われます。

あの臍<sup>ろう</sup>たけたお姿と共に優しい心情を持って、深い歎きをも押しかくした聡明な、そして雄々しい一面をもった夫人、麗しい心を花に歌い月に詠じて自ら慰めると共に、敢然、社会の荒波へ救いの手をさしのべられた尊い事業！

世の逆境に泣く者、老いたる者、貧しい者、親を知らぬ惨めな者、こうした不遇の人々を集め、自ら仏となって愛された夫人の尊い姿には全く感涙を催さずにはられません。（後略）

また、須田秀子（四年生）は、次のように記している。

『麗人』！という言葉は、九条武子夫人のために作られたものとも思えるほどに、夫人は天性、美しい人でありました。

それは容姿の美しいばかりでなく、その心ばえの美しさは古の才媛いにしえをさながらこの世に見るの感があったことでしょう。

夫人の歌は気高く、うるわしく美玉を銀盤にまろばすような感じがいたします。

（中略）

関東大震災後は社会事業におつくしになられ、貧民、病者の救済につとめて神の如く敬われましたが、昭和三年、四十二才（※数え年）をもって長逝しました。

私は寂しいながらも一生を女の亀鑑として過ごした夫人を最も好きで最も崇拜するのであります。

ふる雪に今日もゆふべのとく暮れて

悲しき空をひとり眺むる（\*夫人の歌）

このような文から、九条武子を「女の亀鑑として」尊崇しようとする気持ち、うかがえる。

なお、この雑誌には校長（兼・校友会長、同窓会長）の新家利一が、「御挨拶」という文章を寄せている。その中に、次の文がある。

（前略）進んで貞淑の徳に培い、智を磨き体を練り、祖国愛の精神に燃え、犠牲集団の意識に生き、以って来るべき時代を荷うに足る、国民

竹 長 吉 正

の「母性」たるべきの覚悟こそ望ましいものであります。

らしくあれ、明るくあれ、きまりよくあれ、まごころの一念を以って貫き通せ。かかれば皇国日本の要求する、そして本校が力とする強き女性<sup>\*</sup>が其処に誕生することを信じて疑いません（\*圏点は原文のまま）。

「らしく」「明るく」「きまりよく」という三つの「く」と、「まごころ」という一つの「ろ」をもって「三く一ろの訓」とする訓示が、前任の沼田校長から引き継がれているそうである。

また、この号は「内宮奉斎記念号」となっていて、本校内に伊勢神宮の内宮を造って、その記念式典を昭和10年（一九三五）7月18日に挙行したとの記事がある。そして、「雪の内宮奉斎所」なる写真（雪景色の中の内宮の写真）も掲載されている。

このような環境の中に育っている女子学生が、九条武子について、どのようなイメージを抱いていたのかが、おおよそ推測できる。

それは既に見たように、あまりにも偶像視、偉人視されている。それは彼女たちだけがそうであったというのではなく、彼女たちを取り巻く教師や親や、友だちの多くがそのようなまなざしや心で九条武子を見ていたということである。

私はそれを「虚像」と言い捨ててしまうつもりはない。また、今日の人々の目から見たら、あまりにもかけ離れていて問題にならないと一蹴するつもりもない。それが日本のかつての現実であったと受けとめる。ところで、九条武子と同時代の詩人の霜田史光は、彼女を次のような詩で表現している。

都の白無垢      霜田史光

都の白無垢  
誰のために着たの

九条武子の  
お送りに

九条武子は  
よい女  
心もきれい  
身もきれい  
雪の降る日に  
さよならと

雪よ ふれふれ  
たんとふれ  
屋根から路まで  
すっぽりと  
都は白無垢  
着て送る

（＊この詩は『民謡詩人』昭和3年8月号に発表された。）

この詩を作った史光の意識と、女子学生の意識は、どう違っているだろうか。もちろん、九条武子を尊敬するという気持ちは両者に共通しているが、史光の場合、崇拝するということまでいっていたかどうか。「よい女」とごつくばらん言葉で表現し、「心もきれい」「身もきれい」と実にあっさりを受けとめている。なんら、力が入っていない。

また、この詩は亡くなった九条武子を見送る女性の目線で作られている。「白無垢」を「着て送る」という言葉があるから、見送るのは女性であろうということになる。しかし、この詩では見送る主体は「都」である。「都」とは、人ではない。しかし、人物であるとは言える。都に住む多くの人々、老若男女すべてを含む言葉である。作者はこの言葉を使うことによって、

竹 長 吉 正

九条武子が都の老若男女すべてに慕われた人であったことを暗示しようとしたといえる。

だが、この詩を読んでいくと、さらに、こんなことにも気が付く。すなわち、「白無垢」とは女性が身につける着物のことというよりも、降って来た雪のことを言っているのではないかと。都に住むすべての人が見送るように、空から降ってくる雪も、九条武子の死を悲しんで、見送っている。そういうイメージである。

そして、この詩では九条武子がどのような女性で、どのようなことをしたのかということなどの情報は、いっさい流していない。だから、この詩はそうした情報が既に入手済みという人たちに向けて書かれているのである。この詩が発表された当時は、それで十分、読者には受容された。しかし、時代がどんどん変わっていくと、そうした情報を知らない人が増えていく。だから、今日、この詩を読む人はそうした情報を入手してからでないと、この詩の深い意味は理解できない。

ところで、話を元に戻して、秋田県立横手高等女学校の校友会雑誌を見ることで、九条武子が昭和10年（一九三五）において、まだ、「過去の人」になっていなかったのだということがわかる。おそらく、今（平成28年、西暦2016年）、九条武子を知っているという若者は、あまりいないのではなかろうか。昭和3年（一九二八）に亡くなっているから、没後88年である。このくらい、年数がたつと、たいいていの人は忘れ去られる。

問題は、女子学生たちが抱いていた九条武子に対するイメージである。ある者は、次のようなイメージを抱いている。

- a 「大奥の姫君として花の如く愛<sup>め</sup>でられ健やかに成長」
- b 「冷たい運命の糸に操られ、後世、宗教的、敬虔な生活を送ったあの優姿」
- c 「美しい心を花に歌い月に詠じて自ら慰めると共に、敢然、社会の荒波へ救いの手をさしのべられた尊い事業！」
- d 「不遇の人々を集め、自ら仏となって愛された夫人の尊い姿」

また、ある者は、次のようなイメージを抱いている。

e 「『麗人』！という言葉は、九条武子夫人のために作られたもの」

f 「天性、美しい人」

g 「容姿の美しいばかりでなく、その心ばえの美しさ」

h 「夫人の歌は気高く、うるわしく美玉を銀盤にまろばすような感じ」

i 「社会事業におつくしになられ、貧民、病者の救済につとめ」

これらのイメージには、共通したものが見いだされる。すなわち、一つは、既に述べたように、「貧民、病者の救済」という社会事業に尽くしたという点である。cやdやiに見られるイメージである。しかし、九条武子に対するイメージは、これだけではない。a b e f gに見られるような「容姿の美しさ」と「心ばえの美しさ」を兼ね備えた人というイメージが強く、それゆえ、女学生にとっての「あこがれの人」となっているのである。この点を看過することはできない。すなわち、単に社会事業に尽くしたということだけで彼女にあこがれているわけではないのである。さらに、もう一つ、hに見られるように、歌人としての九条武子に注目する見方も存在するが、この点は前の二つに比べれば、イメージとして微弱である。よって、まとめると、女子学生たちが抱いていた九条武子に対するイメージは、「容姿の美しさ」と「心ばえの美しさ」を兼ね備えた人が、「貧民、病者の救済」という社会事業に尽くしているという、それこそ、天は二物を与えずどころではない、破格の存在としてあがめられていたという実態が浮き彫りになる。しかも、それが、「大奥の姫君として花の如く愛<sup>め</sup>でられ」(a)という凡人とは異なる身分・地位・財力に裏打ちされていたことは、かすかに意識されてはいるが、それが必ずしも前面には押し出されてはいない。つまり、凡人とは異なる身分・地位・財力に裏打ちされていたのだから、ある意味、当然可能な所業・行為だったのだとは理解されていないのである。この辺のところ、女子学生のみならず、当時の人々がマスメディアから情報の流し方の強弱を左右されていたことの証左である。そして、マスメディアから流された情報は、「冷たい運命の糸に操られ」(b)という彼

女の結婚の不幸や、病気という悲劇的な面であった。こうした情報が多く、かつ、強力に流されたため、凡人とは異なる身分・地位・財力という面が消えていった（完全には消えはしない。その面のイメージが弱くなったのである）。そして、九条武子という存在は、庶民にとって身近な存在になっていったのである。つまり、私が言いたいのは、やんごとなき身分・地位・財力の九条武子がどうして庶民や女子学生の「あこがれの存在」となりえたのか、ということの解明である。

マスメディアから流される情報によって、人に対するイメージが作られる。九条武子に対して作られたイメージは、既に見たとおりであるが、それは女子学生には女子学生なりのものがあつた。彼女たちは、九条武子が持っていた「凡人とは異なる身分・地位・財力という面」を越えて、純粹に、「容姿の美しさ」と「心ばえの美しさ」を兼ね備え、周りの弱者や「困っている人々」を救済したいと願い、「理想の人間像」を追い求めたのである。それはそれで素晴らしいことであり、若者が抱く観念としては適確である。しかし、それを現実的に行おうとすれば、自分の職業や財力という面を考慮しなければならない。そうした現実にあぶつかるのが事実である。しかし、若者が青春期において、自分たちの目指す「理想の人間像」として思い描くのは、そうした先のことや、現実的な面をあまり考慮しない方がいいのかもしれない。なぜなら、そうしたことをいろいろ考えると、「理想の人間像」など思い描くこと自体が、無意味となるからである。理想は理想であるから、その時期、意味を持つのである。

ところで、霜田史光の九条武子に対するイメージは、女子学生のように、「理想の人間像」を追い求めて九条武子に行き着いたというのではない。彼の場合、武子が死んだという事実から出発している。そして、生前の武子の行いや何かを回想しつつ（それらはおそらく、当時のマスメディアから流された情報に基づく間接的なものであり、女子学生と似たものであつたらうと推測する）、一人の人間の死を悲しみ、悼むという情念で詩が構成されている。生前の武子の行いや何かについて、くどくどと詳細な情報



を述べることをせず、ただ単に「よい女」「心もきれい」「身もきれい」と述べているにすぎない。ここから、この詩の読者がどんなことを想像するかは、すべて読者に委ねられている。それが史光の採った方法である。すなわち、史光の場合、九条武子は「理想の人間像」として引き合いに出されているのではない。それは、ごく普通の一般的な女性の死を悼むがごとく、作者にとって身近であるのみならず、「都」の人全部にとっても身近である女性の追悼の思いを述べる対象として引き出されているのである。そして、ここでも、九条武子に付着する「凡人とは異なる身分・地位・財力という面」は越えられている。横手の女子学生の場合と同じである。史光の意識の奥深い部分に、それは確かに存在したと思われるが、詩の中ではそれは一切浮上していない。もしそれが少しでも現れていたら、詩に対する多くの共感・共鳴者は得られなかっただろう。したがって史光はあえて、それを隠蔽したのだともいえる。どんなところに生れ、どんなことをした人だかよくわからないけれども、ともかくこの人は「心もきれい」「身もきれい」な「よい女」の人であったのだと説く。そして、その人のお葬式の日、雪が降って、みんなで送ろう、雪まで見送ってくれているのだからと、詩の読者に呼びかけている。清浄な雪と、故人の人柄や人生の清浄さが響き合って、何とも言えない清らかな雰囲気をもたせている。霜田史光にとっての九条武子は、自分の詩的世界をうまく表現できる素材の一つだったのである。

以上、九条武子という日本近代の代表的女性の一人を、昭和十年代の女子学生がどのようなイメージでとらえていたかを、校友会雑誌の記事から探究した。また、それとかがわる形で、武子と同時代の詩人霜田史光が彼女をどのようなイメージで詩作品に登場させているかを探究した。両者とも、当時のマスメディアから流された情報に依拠しながら、そのイメージ形成を行っているのだが、それぞれの表現意図や作者の思い・情念といったものから、文章や詩に表出するものがそれぞれに異なっていることを確かめることができた。

竹 長 吉 正

九条武子について文学事典で調べてみると、次のように出ている。

明治20年（一八八七）10月20日生－昭和3年（一九二八）2月7日没。京都の浄土真宗、西本願寺に生まれる。姓は大谷。京都府師範学校附属幼稚園、同附属小学校に学ぶ。附属小学校の尋常科を卒業後は、学校に通わず西本願寺内で家庭教師について学ぶ。22歳のとき、九条良致（貞明皇后＝大正天皇の皇后、の弟）男爵と結婚。夫と共にヨーロッパに渡り、ロンドンに住む。1年足らずで夫と別れ、義姉大谷かず子（武子の兄、大谷光瑞の妻）とヨーロッパ諸国を見学し、シベリヤ経由で帰国する。かず子が急に亡くなったので、仏教婦人会の仕事に力を入れ、全国を巡回伝道する。26歳のとき、『心の花』（竹柏会・発行、佐々木信綱主宰）に歌を発表し、以後、歌人として活躍する。32歳のとき、義姉かず子と計画した女子高等専門学校（後の京都女子大学）を設立し、女子教育に乗り出す。36歳のとき、関東大震災にあう。被災者の悲惨な姿を見て社会事業に志す。37歳のとき、細民（経済的に貧しい人）救済や児童愛護に活躍するが、過労に陥り発病。京都に帰り母の看護を受ける。40歳のとき、年末まで細民街を巡回し、医療救済、精神教化などの奉仕活動を続ける。昭和3年（一九二八）1月、震災からの疲労が蓄積し、発病。病院で敗血症（\*血液及びリンパ管中に病原菌が侵入し、細菌から分泌する毒素のために激烈な中毒症状を起こし、かつ、諸種の急性炎症を発する疾病）と診断される。2月7日夜、40年4ヶ月の生涯を閉じた。

2月8日、東京の築地本願寺に遺骸が安置され、葬儀の前に「芳貌ほうぼうをおがむこと」が許された。お参りに行った人の話によれば、「ほんぼりに照らされて、長い廊下を歩いて行って、静かな、清らかな美しいお顔を見ると、まったくこの世の人ではない気がした」<sup>(注6)</sup>という。また、ある人はお参りには行かず、心ばかりの香を焚いて、故人をしのんだという。その人によれば、「あまり多くのものに、死者の顔を見せるのは嫌いだから、見られるのはお厭いやだろうと思（って）」<sup>(注7)</sup>とのことであった。

なお、史光の詩「都の白無垢」に出てくる「白無垢」とは、上着下着と

もに白色の服装ということであるが、「白無垢の花嫁」とも、「白無垢の死し出立にでたち」とも使われる。一言、付記しておく。

## 注

- (1) 井上康文『新しい 詩および 及 詩人とその変遷』（交蘭社 昭和6年4月\*この本は大正15年1月刊行『現代の詩史と詩講話』の増補改訂版）149ページ。但し、引用に際し、現代表記に改めた。
- (2) ユーカリ編集部編『追想 福田正夫——詩と生涯』（冬至書房新社 昭和55年11月）所収の石垣りん「福田正夫——「心を打った男たち」より——」による。この文章は、石垣りん「心を打った男たち——福田正夫」（『日本経済新聞』昭和52年8月1日～3日）の再録である。
- (3) 前出(2)に同じ。
- (4) 大井康暢『戦後詩の歴史的運命について』（岩礁社 昭和60年8月）所収「モダニズムと民衆詩派」。引用は同書114ページ。なお、「モダニズムと民衆詩派」の初出は詩誌『岩礁』第37号（昭和56年4月）。
- (5) 前出(4)『戦後詩の歴史的運命について』121ページ。
- (6) 長谷川時雨『近代美人伝』（サイレン社 昭和11年2月）所収「九条武子」。引用は尾形明子編『長谷川時雨作品集』（藤原書店 2009年11月）248ページ。
- (7) 前出(6)『長谷川時雨作品集』249ページ。

## 添付写真

- \*写真① 小冊子『第五回 民謡祭譜本 会員作詩作曲集』（日本民謡協会 昭和10年11月）
- \*写真② 井上康文の詩碑を建設する会／記念誌編集委員会編『詩人・井上康文』（小田原市立図書館内 井上康文の詩碑を建設する会 昭和55年6月）。
- \*写真③ 雑誌『銀杏 第十八号』（秋田県立横手高等女学校校友会 昭和10年12月）。

（本学教育学部教授）